

わたしの原風景

7

伊藤秀男

画家／絵本作家



イラスト／伊藤秀男

目の前には大きな川があった。うしろにも小さい川があった。僕が生まれた家は、川と川にはさまれていたのだ。だからいつも水を思い出す。今でも水辺が大好きだ。水辺を描くとうれしい。

時々、大きな川を、ぼんぼん蒸気が上ってきた。ぼんぼんという音と共にドーナツのような白い煙が流れていく。時には船のりさんが橋の欄干に船をつないでオカへ上がってきた。僕の家は川つぷちで小さな店を開いていたのだった。毎日夕方になると、村中からお客がやってきてひとしきりにぎわう。父は「イカはいかほどいかがですか…」などと皆を笑わせて、五ツ玉の大きなそろばんをばちばちはじく。

店の前の堤防では、樽などにこしかけ、夕暮れの川風に吹かれて、何人かがコップ酒を飲んでいる。毎日のようによれよれの着物でやってくる、大将というあだ名のおじさんは、酔いがまわると、となりの人にいつもの冗談。「あんたんどこの時計は、チヨッキン、チヨッキン、わしの時計は、シャッキン、シャッキンと鳴っておるわ、ワッハッハ」

^{かま} 吠に入った塩を指でひとすくいしてなめながら、おじさんたちは、川を眺めては飲んでいた。

大方お客が去ると、父は「今日は合戦だったわな」と自分も一杯商売物の酒を飲む。

まだ電話がなかったので、川向こうの蔵元まで注文の書きつけとお金をつつんだふろしきを背中にくくりつけてもらって、お使いにいく事があった。「ようけお金が入つてるでおとしゃあすなよ」と母は僕を送り出した。無事つくと、白いカバーのかかったソファのある立派な応接室に入れてもらって、上等のお菓子が出たりするのだった。酒蔵をのぞくと大きな酒樽が並んでいたのを思い出す。以前宮沢賢治の『税務署長の冒険』という作品を絵本にする仕事をしたとき、作品の中の村の酒屋や村人、又ドフロクの樽が並ぶ村人の密造酒小屋を描くとき、僕はこれらの事をいろいろ思い出しては描いたのだった。